

※答えは全て解答用紙に記入しなさい。

受験番号

() ()

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少年時代は昆虫が大好きな「虫オタク」でした。女の子のことは私にはわかりませんが、男の子というのは、物心がつくかつかないかの段階で、好きなものの傾向がはっきりしてくると思うんですね。大きく分けて、虫や化石、星などに関心を持つナチュラル系と、電車やモデルガン、プラモデルに関心を持つメカニズム系。私は完全に前者で、理由はいまだにわかりませんが、自然が作り出したデザインの美しさをただ息を飲んで見つめていました。蝶（ちよう）の羽のはためき、カミキリ虫の優雅なひげと青く光る小さな体…。そういったものに魅入られ、きれいな蝶やカミキリ虫を集めることに夢中になりました。

蝶を集めるには、**A**、どこに行けば蝶に会えるのかを知らなければなりません。図鑑片手に探してみますと、蝶は種類ごとに幼虫が餌とする葉っぱが決まっています。B、アゲハはミカンやカラタチなど柑橘（かんきつ）系の葉を食べますが、アゲハと見分けのつきにくいキアゲハはパセリやニンジンの葉を食べます。葉っぱというのは幼虫にとってサラダみたいなものですから、どれを食べても栄養価は変わらないはず。

C、幼虫は非常に禁欲的に自分の食べる葉を限定していますし、蝶もその葉にしか産卵しない。葉を爪でひつかいて匂いや味を確かめた上で卵を産むんです。そんなふうには、昆虫採集を通して植物にも詳しくなりましたし、「豊かな自然を巡って無益な争いが起きないように、蝶は種ごとにすみ分けをしている」というような自然の摂理もおのずと感じ取りました。

D、自然というのは思い通りにならないということも学びました。蝶の幼虫が食べる葉を知り、探しに行ったからといって、必ずしも見つかるとは限らないんですね。**E**、いないことの方が多い。落胆と喜びを繰り返しつつ、「蝶は太陽光をナビゲーションとして使っているので晴れた日にしか飛ばない」「よく飛んでくる時間帯がある」…といったことをひとつずつ学び、ベストなコンディションのときに探しに行くわけです。その末に見つかるときもあれば、それでもないときもありました。

自然というのは調べたり、行ってみたい、自ら働きかけて扉をたたかないと答えてくれな
いけれども、「扉を叩いたからといって答えてくれるとは限らない。虫たちは私にそう教え

てくれました。

のちに生物学者になってわかったのは、生物の研究においてもそれはまったく同じだということですよ。研究の九十五パーセントは落胆で終わり、思い通りにいくことはほとんどありません。むしろ、思い通りの結果が出たときは疑った方がいい。「データの取り方が間違っているから、仮説が正しく見えるだけで、実際は違う」ということは山ほどあり、仮説を疑う姿勢がないと、実験結果をゆがんで解釈しがちです。

研究者というのはプロフェッショナルであるほど自己懐疑的でありたいもの。「自分は絶対に正しい」と思い込むのは、プロとして仕事をする上で最も危険なことだと思います。

生物学者になったのは、「虫オタク」が高じて。少年時代は新種の昆虫を発見して自分の名前の入った学名をつけることが夢でした。小学校五年生の時、図鑑に載っていない虫を見つけ、国立科学博物館に相談に行ったことがあります。昆虫博士の研究室に案内してもらい、優しく話を聞いてくれた博士が言うには「これは、ありふれたカメムシの幼生（成虫とは異なる形態の幼虫）です」。新種発見の夢はついえました。が、「昆虫の研究を仕事にしている人が世の中にはいる」と知ったのは私にとって大きな発見でした。

好きなものを研究して生活していけるなら、そんな素晴らしいことはありません。「昆虫学者になりたい」という思いから生物学を学ぼうと大学に入りましたが、入学後は昆虫の研究への関心が冷めていきました。プロの昆虫学者の多くは害虫を駆除するための農薬や殺虫剤といった産業に結び付く研究をしていて、きれいな虫、変わった虫を探すだけでは仕事として成り立たないという現実を知ったからです。

福岡 伸一「知恵の学校」

問1 傍線部①②③④の漢字の読みを平仮名で記しなさい。

問2 A B C D E にあてはまる適切な接続詞を次から選び、記号で答えなさい。

ア 一方で イ むしろ ウ まず エ それなのに オ 例えば

問3 傍線部（一）「それ」は何を指していますか。答えなさい。

問4 傍線部（二）「そう」とはどういうことか。答えなさい。

問5 傍線部（三）「仮説を疑う姿勢」とは具体的にどういうことか。答えなさい。

問6 傍線部（四）「入学後は昆虫の研究への関心が冷めていきました」とあるが、どうしてか。答えなさい。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

摂津半国の主であった松山新介の侍大将中村新兵衛は、五畿内中国に聞こえた大豪の士

であった。

その頃、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかっただろう。それほど、新兵衛はそのしごき出す三間柄の大身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水際立った華やかさを示していた。火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纒金のかぶとをかぶった彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさを持っていた。

「ああ猩々緋よ唐冠よ。」と敵の雑兵は、新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立ったとき、激浪の中に立ついわおのように敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。また嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとってどれほどの脅威であるか分からなかった。

こうして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとつては信頼の的であった。

「新兵衛殿、折り入ってお願いがある。」と、元服してからまだ間もないらしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。

「何事じゃ、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、はよう言ってみい。」と育むような慈顔をもつて、新兵衛は相手を見た。

その若い侍は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であった。そして、幼少の頃から、新兵衛が守役として、我が子のように慈しみ育ててきたのであった。

「ほかのことでもおられない。明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄をしたい。ついでには御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸しててもらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみとうござる。」

「ハハハハ。念もないことじゃ。」新兵衛は高らかに笑った。新兵衛は、相手の子供らしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

「が、申しておく、あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ。」と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑った。

その明るる日、摂津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵としてのぎを削った。戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

吹き分けられるように、敵陣の一角が乱れたところを、猩々緋の武者は槍をつけたかと思
うと、早くも三、四人の端武者を、突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。

その日に限って、黒革緘の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心
の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。そして自分の形^④だけ
すらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

彼は、二番槍は、自分が合わそうと思ったので、駒^⑤を乗り出すと、一文字に敵陣に殺到
した。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立った敵陣が、中村新兵衛の前には、びくとも
しなかった。そのうえに彼らは猩々緋の「槍中村」に突き乱された恨みを、この黒革緘の武
者の上に復讐^⑥せんとして、たけり立っていた。

新兵衛は、いつもとは、勝手が違っていることに気がついた。いつもは虎に向かっている
羊のようなおじけが、敵にあった。彼らがうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、何の造^⑦
作もなかった。今日は、彼ら是对等の戦いをするときのように、勇み立っていた。どの雑兵
もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し發揮した。二、三人突き伏せることさえ容易ではな
かった。敵の槍の矛先が、ともすれば身をかすった。新兵衛は必死の力を振るった。平素の
二倍もの力をさえ振るった。が、彼はともすれば突き負けそうになった。手軽にかぶとや
猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであった。敵の突き出
した槍が、緘の裏をかいいて彼の脾腹を貫いていた。

菊池寛「形」

問1 傍線(ア)〜(カ)の漢字の読みを平仮名で記しなさい。

問2 傍線①「敵に対する脅威であり味方にとっては信賴的であった」とあるが、「信賴
的」であるのはどんなときのどんな姿か、具体的に書かれた部分を抜き出しなさい。

問3 傍線②「はぐくむような慈顔」などから、新兵衛と若い侍のどのような関係がうかが
えるか。適切と思われるものを、一つ選びなさい。

ア 年は離れていても、互いに気を抜くことのできないライバル関係。

イ 新兵衛が若い侍に忠実な家臣として、その命令に従ってきた関係。

ウ 新兵衛が父親のように、若い侍に愛情を注いできた関係。

エ 上下や年齢の隔たりなく、お互いに頼り頼られる関係。

問4 傍線③「あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ」は、新兵衛のどのよう
な考えを表すものですか。適切と思われるものには○を、そうでないものには×を付け

なさい。

ア 自分の羽織とかぶとは、自分の飛び抜けた実力とこれまでの功績の象徴である。
イ 自分のこれまでの功績は、自分の実力と、羽織とかぶとの力が合わさって成し遂げられたものである。

ウ 自分の羽織とかぶとは、他人に貸すことのできない、自分の一部のようなものである。

エ 自分の羽織とかぶとを身に着けて戦えば、初陣の侍であっても自分と同じような功績をあげることができる。

問5 傍線④「自分の形」とは、具体的には何を指すか。文章中から二つ、それぞれ六〜八字で抜き出さない。

問6 傍線⑤「いつもとは、勝手が違っていている」とあるが、それはなぜか。適切と思われる理由には○を、そうでないものには×を付けなさい。

ア 黒革緘の武者が中村新兵衛であるということに、敵が気づいていなかったから。

イ 猩々緋の羽織を着ていない中村新兵衛はいつもの力を発揮できないということを、敵がいち早く見抜いたから。

ウ 全く普通である黒革緘のよろいを見ても、敵は少しも驚かず、浮き足だつこともなかったから。

エ 敵が、猩々緋の武者に突き乱された恨みを晴らそうと、たけり立っていたから。

【三】 次の各語句の対義語を答えなさい。

- 1 客観
- 2 誤答
- 3 感情
- 4 需要
- 5 現実

【四】 次の各四字熟語を完成させなさい。

- 1 完全（ ）欠
- 2 無我（ ）中
- 3 絶（ ）絶命
- 4 晴耕（ ）読
- 5 付和（ ）同